

のであるが、その辺りの反省や工夫と言ったものはまるで無い様である。他方、これらを見守る住民の中にはさすがにオニバスが無くなった今、昔をなつかしがる年配の人が多し。しかし、その復活、保護となると主体性のある意見はほとんどなく、時代の流れと言う所に落ちていてしまう。それでは若い人はどうかと言うと、オニバス自体を見た事は無く、かつての泳げる様な池も知らず、もはや溜池の管理にかかわる事も無く、たまに行く釣り以外ほとんど無関心と言うのが普通の人である。

種の絶滅の持つ重大な意味と言うものはなかなか解りにくいものかも知れない。日常諸事に対する判断の如く、全てが経済的な面から規定されるのであれば、世の発展につれオニバスが消滅するのは自然の成り行きと言う結論しか無く、我々もその様な考え方に無意識の内に慣らされて来ている。しかし、野生生物は一度消滅してしまえば二度と戻らず、生態系の退歩は永遠に影響を残すと言う事を考えると、なかなか甘い判断は許されないもの

である。

今後、いわゆる自然保護の一環として水草に対する一般の関心は高まるものと思われるが、これを単なる流行として終らせないためにもオニバスを初めとする貴重種の保護にはたす水草研究会の役割りは大きいであろう。筆者は未だ明確な解答を知らないのであるが、「オニバスの存在価値と、その保護の持つ意味」を一つの問題として提出しておきたい。その解決には国内のみならず、世界中の意識ある人々が注目しているものと信じる。

終りに当たり、調査に協力して頂いた60名の地元の方々に感謝します。

#### 参考文献

- 橋本卓三 (1986) 福山市千塚池のオニバス.  
水草研究会報 26号, 6-11
- 橋本卓三 (1987) 広島県深安郡一帯のオニバス自生地.  
同30号, 9.

#### ○神奈川県植物誌調査会編『神奈川県植物誌 1988』 (神奈川県立博物館、1988年3月、1442頁、頒価10,000円)

神奈川県下を108のメッシュに分け、150人をこえる方たちが9年間にわたり奮闘した調査の結果が、この大部な植物誌となった。県下に産する全ての植物について簡潔な説明、識別のポイントを示した図、そして標本によって裏付けられた分布図が載せられている。ここまで盛り込んだ県単位の植物誌は今まで例を見なかったものである。この調査を通じて集められた標本は12万点を越えるというが、その膨大な資料を整理してこの植物誌の完成にこぎつけるまでのプロセスも紹介しており、今後、このような企図を実現するための参考にならう。巻頭には32ページにわたるカラー写真、また巻末には神奈川県植物季節、植物研究史をはじめ、貴重な資料が収められている。

#### ○筒井貞雄著『福岡県植物目録 1. シダ植物』(福岡植物研究会、1988年4月、516頁、頒価10,000円)

福岡県植物研究会は同県のフローラ解明のため、現地調査を重ね標本の蓄積を進めている。この度、その努力が実ってシダ植物の目録が完成した。第1部は標本目録

である。本書の基礎になった標本が全て引用され、各種についてその生態や分類に関する<ノート>が付される。第2部は標本図集である。これは標本を直接縮小コピーしたシルエット集であるが、変異の著しい種はいくつかの変異形を示すという配慮がなされている。第3部は分布図集。全種につき分布図(平面分布、垂直分布)が作成してあり、同県におけるシダ類の分布状況が一目でわかる。

これだけの内容をもつ植物誌を編むのは、時間的にも経済的にも、そして精神的にも並大抵のことではないだろう。先の『神奈川県植物誌』とともに、地方植物誌の双壁といえよう。続編に期待したい。

#### ○J. J. Symoens ed. "Vegetation of Inland Waters" (Kluwer Academic Pub., 1988, 385p)

タイトルを見ると植生を扱った本のようなのだが、この本の内容は幅広い。11人の専門家が各章を担当し、水界の環境、その調査法、水中での光合成に関する章のあと、水生植物群落の構造に関する章がつづく。後半が植生を主題とした章だが、植生の記述というより、さまざまな対象やアプローチのもつ問題点を論じることが主となっている。